

「伴走」して起業家導く

メルカリ・小泉社長、資金調達で強み



金融力 @ビジネス



小泉氏は創業者の山田進太郎氏を支える

「伴走者」を運んだ。振り出しは大和証券S M B C (現大和証券)。配属は企業の新規株式公開(IPO)を支援する部署だった。ミクシィ、ディー・エヌ・エーなど2000年代に頭角を現したIT企業のIPOを20代半ばで担当した。ミクシィでは上場後に担当を外れた後も社内会議に参加するなど手厚いサポートを継続し、最後にはミクシィに転職してしまった。「上場で、サイスの大きな服を着せてしまった」という責任感もあった。急成長を遂げて社員が増えたが、会社の骨格となる経営体制は追いついていなかった。小泉は執行役員CFO(最高財務責任者)として財務面以外にも、人事などコーポレート部門を統括した。若手クリエーターが自由にアプリケーションを作れるよう資金支援する「mixiファンド」を創設。多くのクリエーターを輩出した。小泉の持論は「ナンパ12が優秀な会社は成長する」というものだ。「事業モデルが斬新で最初の資金調達に成功しても、セカンドやサードのファインダンスが難しいから」と説く。

「自分の手でもっと小さな会社を大きく成長させた」といって衝動に駆

られ、小泉はミクシィを退職し、スタートアップ支援を経て18年に創業間もないメルカリに入る。メルカリがフリマアプリの後発ながらライバルを抜き去った隠れた要因には資金調達がある。アプリの認知や利用拡大のために広告枠を買ったため資金調達に奔走し、14・5億円という創業1年の企業には巨額の資金調達に成功した。投資する立場で企業を見ていた証券時代の経験に基づき、CMの費用対効果や収支の見通しを精緻に示して投資家の信頼を得た。

「金融はテクノロジーと相性がいい。もっと発展する余地はある」と小泉は語る。メルカリでの売り上げをそのまま店舗などでの支払いに使える「メルペイ」など、金融に近い新たな事業にも参入した。金融事業でも新たなプラットフォームを制することができる。金融機関から事業会社に転じた小泉は、今度は事業側から金融事業に乗り出す。「君は金融に出来ない方がいい」。就活で面接官にかげられた言葉に、小泉の答えを出そうとしている。

敬称略 (白壁達久)

詳細な記事を電子版に
▼ストーリー「脱藩金融人がゆく」

米アマゾン・ドット・コム(情報技術)の世界に転じた。米国では優秀な人材が金融街よりベンチャー経営を選ぶようになった。この流れは日本にも押し寄せている。「新聞の一面に自分が主役として載る仕事をしたくないなら、君は金融に出来ない方がいい」

メルカリ社長兼最高執行責任者(COO)の小泉文明(38)は、学生時代に外資系投資銀行の採用面接で言われた一言が忘れられない。金融機関はあくまで裏方。企業の成長を陰でサポートするのが役目という意味だ。あれから16年。小泉は裏方ではなく、ミクシィの笠原健治(43)やメルカリの山田進太郎(41)という起業家に寄り添う